「主を知り、あなた 自身を知ること」 (5):神はどのよ うに私たちに語られ るのか

祈りにおいて神が使われる 「言葉」は神秘的で、私たち の思い通りにはなりません。 しかし、祈りに堅忍すれば、 少しずつ私たちは自分の心の 変化を実感するのです。

2023/03/10

ヨルダン川渓谷の東、ヘロデ大王の 領地であったペレア(今のヨルダン に位置する)の丘、死海から海抜 1100mの丘の頂上にマケラス要塞は 堂々とそびえたっています。そこ は、ヘロデ・アンティパスが洗礼者 ヨハネを牢に入れた場所です。(マ ルコの福音書6章17節を参照) [1] 岩 に掘られた冷たく、じめじめした牢 獄の中。闇と沈黙の世界。「時は過 ぎていくが、イエスは自分が期待を しているようにはっきりと自分を表 そうとしない・・」そうした考え が、ヨハネを苦しめていました。イ エスの偉大な業の噂は彼の耳にも 入ってきましたが、(マタイの福音 書11章2節参照) イエスは自分を救 い主として示してはいないようでし た。彼に直接尋ねても沈黙したま ま。ヨハネは間違っていたのでしょ うか。いや彼はすべてをはっきりと 見たのです!「霊」が鳩のように天 から降って彼の上に留まるのを。 (ヨハネの福音書1章32-43節参

照)だからこそ彼は逸(はや)る心 で、弟子の幾人かを先生の元に送っ てこう尋ねさせたのでした。「来る べきお方はあなたですか。それとも 他の人を待たねばなりませんか。| と(マタイの福音書11:3参照)イエ スは思いがけない答えを返しまし た。質問にはっきりと答える代わり に、ご自分の業に注意を向けさせた のです。「目の見えない人は見え、 足の不自由な人は歩き、重い皮膚病 を患っている人は清くなり、耳の聞 こえない人は聞こえ、死者は生き返 り、貧しい人は福音を告げ知らされ ている。」(マタイの福音書11:5参 照) それはいささか漠然とした答え ではありましたが、聖書の預言の中 にあるメシヤとその王国の印を知る 者にとっては、十分な答えでした。 「あなたの死者が命を得、わたしの しかばねが立ち上がりますよう に。 | (イザヤ書26:19) 「その時、 見えない人の目が開き、聞こえない 人の耳が開く。| (イザヤ書35:5)

こうして主は、ヨハネにご自分を信頼するよう促し、「わたしにつまずかない者は幸いである。」(マタイの福音書11:6)と言葉を結びました。

この聖書の場面は、洗礼者ヨハネと 同様に、祈りの中で神の声を聴くこ とができないと考える人の状況を彷 彿とさせます。私たちがそうした状 況に陥る時、イエスは私たちがもの の見方を変えて、人間的な確信を求 めるのを止めるように、そしてあの 神秘的な冒険、主がご自分の行いと 聖書を通して語られる神秘に分け 入っていくように招かれるのです。 「私につまずかない者は幸いであ る。」というあの最後の言葉は、私 たちに対する主の呼びかけであり、 たとえ神が期待通りに答えて下さら ない時があるとしても、祈りにおい て信仰を保ち続けるようにという主 の招きであると読み取ることができ ます。

「沈黙」を破るジェスチャー

祈りを始めた人たちは、しばしば神 が「黙している」という思いにさら されます。「神に話しかけて自分の ことを色々伝えたり、自分が何をす べきかを尋ねたりしても、神は私に 答えを下さらない。神の方から私に 何も話して下さらないのです。」と いうふうに。これは旧約聖書のヨブ の不平と同じです。「神よ、私はあ なたに向かって叫んでいるのにあな たは御覧にならない。| (ヨブ記30 章20節)こうした時、人は困惑しが ちです。「いつも祈りは対話だと聞 いているが、私には神は何もおっ しゃらない。なぜ?神は他の人たち に語られるというのなら、なぜ私に は話しかけて下さらないのですか。 私は何か悪いことをしているのです か。| と考えるのです。祈っている 人たちのこのような疑問は、時とし て希望に反する誘惑の機会になり得 ます。「もしも神が私に答えて下さ

らないのなら、何のために祈るのですか。」と。更には沈黙を神の不在だとみなし、「神が私に何も語らないのは、神がいないからだ。」と考えてしまうなら、信仰に反する誘惑にさえなるのです。

こうした疑問にどのように答えれば いいのでしょうか。 第一に言えるこ とは、神が沈黙しているように感じ るからといって、神の存在を否定す るのは論理的ではないということで す。神には「黙る」という選択肢が あり、「沈黙」を選んだとしても、 それが神の存在の有無を左右するこ とも、私たちに対する神の愛に影響 を及ぼすこともありません。神へ の、そして神の善への信仰はそうし たことすべてを超えたものです。こ のような誘惑の時は、次の詩編の言 葉を使って神に願い、心を信仰と信 頼で満たす機会です。「神よ、沈黙 しないでください。黙していないで

ください。静まっていないでください。」(詩編83:2)

また私たち自身の神の声を聴き取る 力を疑うべきではありません。人の 内面には、原罪や自罪によって弱く なっているとは言え、神の恵みに助 けられて神の言葉を聴きとることが できる「素質」が備わっているから です。教会のカテキズムの第一章の タイトル「人間は神を知ることがで きる! がこのことを示しています。 聖ヨハネ・パウロ2世は次のように 説明しています。「キリスト教の伝 統的な考え方によると、人はcapax Dei つまり神を知ることができ、自 分自身を神から創られた賜として受 け止めることができるのです。確か に人は神の似姿として創造され、神 との個人的な関係を生きることがで きるのです。」[2] 「神との個人的な 交わり、それは言葉と仕草を通して 生まれます。」 りょいや、人間の愛に おいてもそうであるように、仕草だ

けによる時もあるのです。例えば、 「眼差しが物語る」、つまり二人の 人が目を合わすだけで沈黙のうちに 意思疎通ができるのと同様のこと が、人が信頼をもって神と語る時に も起こります。聖ホセマリアも「神 を見つめ、また神から見つめられて いると感じながら祈りを続けること です。イエスがヨハネをご覧になっ た時のように。あの時、イエスの視 線はヨハネの生涯に決定的な方向性 を与えたのでした。| [4]と教えてい ました。 カトリック教会のカテキズ ムには次のように書いてあります。 「念祷とは、イエスへと注ぐ信仰の まなざしです。| 5 多くの場合、 長々と言葉を続ける祈りよりも、一 つの眼差しの方がずっと価値があ り、私たちの人生に愛と光を与える 豊かな内容を含んでいるのです。聖 ホセマリアは、観想生活がもたらす 喜びについて語りながら、この事に 関して次のように断言されました。 「言葉で言い表すことはできないの

で、もはや言葉は不要になる。知性 は平静を取り戻し、思いめぐらすこ ともなく、ただ見つめるだけ。そし て、心はふたたび新しい歌を歌い始 める。愛のこもった神の視線を四六 時中感じ、味わうことができるから です。| ^[6] 神の視線が自分に向けら れていることを知るだけではなく、 その眼差しを感じ取ること自体が神 の賜です。そして私たちは、聖アウ グスティヌスの言葉を借りるなら、 「神の物乞い| [7]となってその賜を 謙遜に懇願することができるので す。

この男のように話すものは他にはい ない

マザー・テレサは「口祷の祈りでは私たちの方が神に話をしますが、念祷では神が私たちに語り掛け、それによってご自分を私たちの中に注ぎ込まれるのです。」^[8]と述べていました。聖女は「神はご自分を私たち

の中に注ぎ込まれる」という言葉で 言語を絶する出来事を表現しようと したのです。実際に、祈りには多く の神秘的な面があります。祈ってい る人と神との間のこうした神秘的な 出会いは様々な方法で生まれます。 中には最初は、はっきりとせず、理 解し難い場合や容易に説明できない 場合もあります。カトリック教会の カテキズムは次のように私たちに警 戒を呼び掛けています。「わたした ちはまた『この世』の価値観とも衝 突することになります。たえず警戒 していなければ、それに負けてしま います。その価値観とは、たとえば 理性や科学によって証明されたもの だけが正しいものである(ところ が、祈りとは神秘であり、わたした ちの意識やわたしたちの無意識な思 いなどを超えたものなのです)と か、・・・」^[9] 私たちは度々、証拠 を切望します。洗礼者ヨハネのよう に。けれども超自然の領域ではすべ てを明らかに説明することはできま

せん。神が霊魂に語り掛ける仕方は 私たちの理解を超えていて、私たち はそのすべてを認識することはでき ないのです。「その驚くべき知識は 私を超え、あまりにも高くて到達で きない。 | (詩編139番6節)と詩編 にある通りです。確かに、我々が使 う文字と神の文字、我々の言語と神 の言語は異なります。神の言葉は 我々が使う言葉ではないのです。神 は話すために声帯を震わす必要など ありませんし、神の声が耳を通して 聞こえてくるのでもありません。神 の声は「心」と呼んだり「良心」と 呼んだりする、私たちの存在の奥深 くの神秘的で隠れた所で響くので す。『10』神は「ご自分の存在」という 現実から「私たちの存在」の現実へ と話しかけられるのです。それはま るで一つの星と他の星との関係が言 葉ではなく、重力によって成り立っ ているのと同じようなものです。神 が私たちに話しかける時、言葉は必 要ありません。言葉という手段を使

うことも神はお出来にはなります が、私たちの心を揺さぶり、私たち の感覚をご自分の方に向け、知性を 照らすためには、神ご自身の御業 と、私たちの霊魂内の聖霊の密かな 働きかけだけで十分で、神はそう やって私たちを優しくご自分の方に 引き寄せられるのです。私たちは神 の語り掛けに最初は気づきすらしな いかもしれません。それでも時と共 に、自分の中で起こっている効果を 私たちが見極められるように神が助 けて下さることでしょう。恐らく、 私たちをもっと忍耐強い者やもっと 思いやりのある者にしてくださった り、よりよく働くよう、或いはもっ と友情を評価するように助けてくだ さったりしたことでしょう。つまり 益々神を愛するように導いて下さる のです。

ですから教会のカテキズムには祈り について「祈っている者の心が変え られていくということこそ、私たち の願いに対する神からの最初の応答なのです。」[11]と記されています。心の変容は往々にしてゆっくり、少しずつ起こるので、気づかない時もありますが、確かなものです。私たちはそれを見分け、感謝できるようになりたいものです。

聖ホセマリアは「内的覚書」に次の ように綴っています。「1931年8月7 日。この教区では本日、我らの主イ エス・キリストのご変容の祝日を 祝っている。-ごミサの中で自分の意 向のために祈った時に、首都での滞 在期間中に神が私の内部に起こされ た変化を感じた・・・。その変化は 私の欠点にも関わらず、私の協力な しに起こったと断言できる。自分の 人生全体を神のみ旨、オプス・デイ の実現のためにささげる決心を更新 したように思う。 | [12] 祈りにおいて 感じられる私たちの内部で起こる変 化こそが、神が話しかけられる一つ のやり方です。何という素晴らしい

やり方でしょう! 福音史家ヨハネが語る神殿の下役たちの言葉も理解できます。「下役たちは、『今まであの人のように話した人はいません。』と答えた。」(ヨハネ7章46節)

神は他の誰もできないような方法で話されます。つまり心に変化をもたらすのです。「神の言葉は生きており、力を発揮し」(ヘブライ人への手紙4章12節)私たちを変えます。私たちの霊魂に及ぼすその働きは私たちを超えたものです。

このことを神ご自身が預言者イザヤの口を借りて告げています。「天が地を高く超えているように、私のはあなたたちの道を、私の思いる。 なたたちの思いを高く超えている。 雨も雪もひとたび天から降れば、るで表し、芽を出させ、生い茂らせ種まく人には種を与え、食べる人

には糧を与える。そのように、私の口から出る私の言葉もむなしくは私の言葉もむない。それは私の望むとでは、私の主を成し遂げ私が与えた使命を果たす。」(イザヤ55:9-11)更にこのままが、私たちは謙遜へと導かれます。「謙虚さこそが、祈りのたまなです。」[13] 謙遜は私たちが構えなのです。」[13] 謙遜は私たちがいを神に開き、神の業に信頼するりけとなるのです。

最高に自由である神

神はお望みの時に語られます。聖霊に対して私たちがレールを敷くことなどできません。霊魂内での聖霊の働きを導くのは私たちではない言われました。「聖櫃におられるイエスっとは、お望みの時に、おりないないないないないないに、話しかける御方です。具体的時に、話しかける御方です。具体的

なことを私たちの信仰と忠られたちの信仰と忠さなれたちの信仰と忠さを望まれている答えを望まれる答えを望まれる答えを望まれる答えを望まれるでして、見れたちは、間りのといって、自己をして、ではないではないではないではないではないではないではないではないです。というではないではないです。というではないです。というではないです。というではないです。というではないではないです。ないではないに、というではないではないです。

オプス・デイの創立者にも度々そのようなことがありました。例えば 1931年10月16日の出来事。彼自身が次のように語っています。「ミサの後で教会の静寂の中で祈りをしよった。アトチャ駅で新聞(ABC紙)を買って、市電に乗った。今これを書いている時、新聞の一段落も読めていない。熱い感情の溢れる祈りがど

うしようもなく湧き上がってけるのでではた。市電の中にいる時にいるまでがあまずられた。市電が出まれているまでがある。」「161 静かな場所で祈みともないないがは失いのはないないがはないないがいかがいないがいかがいないがいかがいないがいかがいないがいないがいかがいる。といるに至ったのです。

ちにだか、どのようにだか分かりま せんが、捕らわれていました。…良 い考えを抱くことには、あまりにも 無能で、自分ながらおかしくなりま した。そして神が支えることを束の 間でもお止めになった時の、霊魂の 浅ましさを見て、面白く思っており ました。…霊魂は、いくら焚き木を かまどに入れ、自分にできるわずか な事をいたしましても、神の愛の炎 を燃え上がらせることはできませ ん。…聖主が御自ら、もう一度、た きつけて下さるはずで、それまで は、いくら苦心してプープー吹いて も、焚き木をいろいろとなおしてみ ても、結局一層火を消してしまうば かりです。最後の策は、自ら何もで きないことをまじめに認め、前に申 しましたように、何か功徳のある他 の業に携わることだと思います。多 分、聖主は霊魂がこういう業に従事 し、自らの経験によって、自分がど れほど無能なものであるかを学ぶよ うに、彼から念祷をお取り去りにな

るのかもしれません。| [17] このよう に神はご自分が望む時に語り掛けら れますが、何度も何度も、私たちに 話しかけておられたのです。いや、 どの瞬間も私たちへの語り掛けを止 めることはないと言った方が良いか もしれません。 祈り方を学ぶとは、 ある意味で神の御業の中に示される 神の声を認識できるようになること だと言えます。イエスご自身が、洗 礼者聖ヨハネの目を開いた時のよう に。聖霊は絶えず私たちの内で働い ておられます。だからこそ、聖パウ 口はコリントの人々に「聖霊によら なければ、だれも『イエスは主であ る』とは言えないのです。| (コリ ント1 12:3) と思い出させたので す。この事を知るならば、私たちの 心は平和で満たされるはずです。し かし、逆にこの真理を見失うなら、 簡単に失望に陥ることでしょう。 「祈りによって神を探し求める人々 であっても、祈りが自分の力だけで

はなく聖霊の助けによるものでもあ

るということを知らないので、早々に落胆してします。」「181」がはいてもまいます。」である。はいたというで、神秘的な霊魂内ではかった。である。というでは関を持つ必要を持つが出ているが、である。といるでは関をはいるが、である。といるが、どうしてもなるが、どうといるが、その人は知らない。」(4:26-27)

José Brage

- ^[1] フラウイウス・ヨセフス、『ユダ ヤ古代史』18,5,2参照。
- ^[2] 聖ヨハネ・パウロ二世、1998年8 月26日の一般謁見での言葉。
- [3] 『カトリック教会のカテキズム』、2567番 「…神がご自分を啓示し、人間自身の臣の姿を明らかにされるにつれて、祈りはいわば相互の

呼び合い、契約のドラマとなっていきます。そしてこのドラマが、ことばと行為を介して心を支配するものとなります|参照。

- [4] 『道すがら語りつつ(Mientras nos hablaba en el camino)』所収、聖ホセマリア・エスクリバー、1959年1月9日の説教。
- ^[5] 『カトリック教会のカテキズム』 2715番。
- [6] 聖ホセマリア・エスクリバー『神の朋友』307番(説教「聖性を目指して」)。
- [7] 聖アウグスティヌス、「説教」 56,6,9参照。
- ^[8] マザー・テレサ、No Greater Love, New World Library, p. 5。
- 『カトリック教会のカテキズム』 2727番。

- [10] 「良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただひとり神とともにあり、神の声が人間の深奥で響きます」。『カトリック教会のカテキズム』1776番参照。
- ^[11] 『カトリック教会のカテキズム』 2739番。
- 型: 型ホセマリア、「内的覚書」217番。(Andrés Vásquez de Prada, El Fundador del Ous Dei, tomo I, Rialp, Madrid, 1997, p.380-381)。
- ^[13] 『カトリック教会のカテキズム』 2559番。
- [14] 1972年 6月 18日の家族の集いでのメモによる聖ホセマリアの言葉。
- ^[15] 『カトリック教会のカテキズム』 2656番。
- ^[16] 聖ホセマリア「内的覚書」334 番。(Andrés Vásquez de Prada, El

Fundador del Ous Dei, tomo I, Rialp, Madrid, 1997, p.389) 。

[17] イエスの聖テレジア、『イエズスの聖テレジア自叙伝』、東京女子カルメル会訳、中央出版社、1981年、第37章p.494

^[18] 『カトリック教会のカテキズム』 2726番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/Shu-wo-Shiri-anata-Jishin-wo-Shiru-koto-5/(2025/10/27)